

パリ通信第125号

松濤館空手道昇段おめでとうございます。

昇段審査

5月14日(土)午前8時。パリ14区メトロ「ポルト・ドルレアン駅」から歩いて5分、エリザベス体育館でフランス空手連盟「昇段審査」が行われた。フランス空手連盟が創立されたのは1975年のことで、日本の空手道の他、ベトナム、東南アジアの武道を奨励している。連盟登録者数は約25万で、今回の審査は(ミットやヘルメットを付けるフルコンタクトではない)伝統空手の黒帯初段と二段で、朝6時に起きて会場に向かった。

空手を始めたのは6年前、歳と共に体力・気力の衰えを実感し、何かスポーツを始めようと思ったのがきっかけだった。フランスでスポーツといえば、ナンバーワンはサッカー、200万近いクラブ登録者数である。女子チームも増え続け圧倒的な人気だ。2番手がテニスで95万人が実践し、日本でも時々テニスはしていたので候補に考えたが一人ではできないし、パリ市内のコート探しは結構大変だ。3番目に人口が多いのが馬術で66万人を超える。馬は好きだが、馬術はお金がかかり現実的ではない。4位バスケット(52万人)、5位柔道(37万人)と続く。



日本の国技である柔道はフランスでも人気が高いが、武道というよりスポーツの色合いが濃く、受身ができないまま投げられては怪我のもとで柔道も現実的でない。柔道は無理だが、日本の武道は精神力60%、体力・技術40%で生涯学び続けるものだから、多少歳をとっても何とかなるかも知れないと思い、知り合いのフランス人が通う松濤館空手道の道場に通うことにした。

道着と帯だけでどこでも稽古ができる。組手の相手は必要だが、基本と型は一人で行える。個人技が基本だから自分のペースでできるし、同時に他者とも向かい合う。私の師範

はアラン・トゥーバスと言う70歳を超えた黒帯7段フランス人で、日本の空手をヨーロッパに伝道した日本人師範から直接教えを受けた世代の人である。

武道はスポーツとは違う。スポーツは表彰台が頂点で、武道は一生をかけて極めるものだといつも道場で繰り返している。東京オリンピックで空手が競技種目になった時もメダル争いは空手の精神に反すると嘆いていた。日本人の私にとっては説得力のある言葉だが、理解できないフランス人も少なくない。

稽古着に帯を締めると気が引き締まり、気合いが入ると言ってもフランス人にはピンと来ないようだ。道場の雑巾掛けから稽古が始まる日本と違って、遅れてきたり、稽古中におしゃべりする人も多い。稽古着はしわくちゃだったり、汚かったりで当初はびっくりすることが多かった。同じ空手でも日本とは随分様子が違う。

しかし、日本人は私一人と言うこともあって、アラン先生には一から基本を教えていただき、道場の皆にもとても親切にしてください、黒帯2段まで到達できたことに感謝の念で一杯である。日本と同じく「昇段審査」は年2回、コロナ禍で2019年末を最後に2年以上審査は中断されていた。道場も閉まったままで自主稽古の期間が長く続いた。コロナウイルスに感染した時には審査は見送るしかないと思った。しかし、試験前日まで稽古をしてくださったアラン先生や皆の期待に応えることができほっとしている。プレッシャーは大きかったが目標達成できて本当に嬉しく、私事ながら「パリ通信」で小原先生にご報告させていただきたいと思った。

理由のないロシア軍侵略で日常も命さえも奪われているウクライナの人々を思うと、日常生活を無事に過ごせることが有難いと思う。ウクライナ侵略が他人事でないフィンランドがNATO加盟申請を決議し、スウェーデンもフィンランドに続くようである。いつ何をするか予想ができないプーチンへの脅威がヨーロッパ全体に広がりつつあり、ウクライナ軍事侵略から世界大戦へ向かうのではないかと怖い。フランスも軍事訓練を報道するようになり、自国を守る軍事力をアピールすること自体が戦争を準備しているかのようで怖くなる。マクロン大統領が再選されたが新内閣が待たれ、コロナ禍対策も途中で途切れ、16日(月)からは交通機関でのマスク着用義務もなくなる。世界に目を向けても国内を見ても不安材料ばかりでこの先どうなるのかわからない。ウクライナの戦火が一日も早く終わることを願うばかりである。